

5 中小企業研究者養成事業

別府産業工芸試験所 宮崎 徹 吉岡 誠 司
佐藤 幸志郎

要 旨

別府竹製品製造業の若手自営業者や次代を担う若手後継者3名を対象に、工芸産品の商品開発手法の基本的な共通基盤の確立を目指した共同研究を実施した。客員研究員の指導のもとに、当所デザインスタッフとの具体的商品開発プロセスの演習を兼ねた試作提案を目標に、他商品との競合等に対応する商品開発能力の向上と開発体制の相互強化を目的とした。

1. 緒 言

これまで、工芸産品における商品開発の手法は産地や業種、開発者によって異なり、体系化された理論やマニュアルは存在しない。しかし、工業的に作られる他の素材の商品や海外を含む他産地、他商品との競合に勝ち抜いて行くには、当産地として手法を研究し、ある程度の基本的な共通基盤システムを確立しておく必要がある。

また、生産、流通重視の視点から生活者重視の視点への転換による開発手法の研究も必要になっている。このため、本事業において、当地域の技術者との共同研究を通じ、技術者の開発能力の向上と開発手法基盤システムの確立を目的に実施する。

2. 研究概要

はじめに、県内外の客員研究員2名の方からの指導を受けながら、研究内容・方法を検討し、基本的方向付けを行った。当所デザインスタッフ3名と竹製品製造業関連の技術者3名との連携のもとに、デザイン・工芸の概論から始め、共通の認識を確認しながら、具体的モデルタイプの開発試作を目標に週2日程度のペースで研究を進めた。

〈研究の日程〉

平成6年7月29日～平成7年3月31日

〈養成テーマ〉

「工芸産品の商品開発手法のシステム化研究」

〈客員研究員〉

- ・(有)イングデザイン研究 長 勝也 所長
- ・大分県立芸術文化短期大学 久保木 真人 助教授

3. 研究内容

事業実施計画に基づき年間カリキュラムを作成し、以下の項目に沿って共同研究を進めた。

(1)デザイン開発の基本的な方法論研究

- ①デザイン・工芸の概論研究
- ②工業的デザイン開発手法の研究
- ③工芸的デザイン開発手法の研究

デザインと工芸についての共通認識を基本的柱に、工業的デザイン開発手法と工芸的デザイン開発手法とを比較しながら、具体的な造形、色彩、設計、材料について研究を進めた。

(2)商品開発手法の基盤システム研究

- ①商品開発基本システムの研究
- ②商品開発手法のプロセス研究
- ③商品開発プロセスの表現手法研究

開発技法・素材・商品調査等の情報収集の重要性を念頭に、開発プロセス、開発手法の研究から開発手法の分類、整理を行い商品開発の基本システムを確認した。

(写真1)

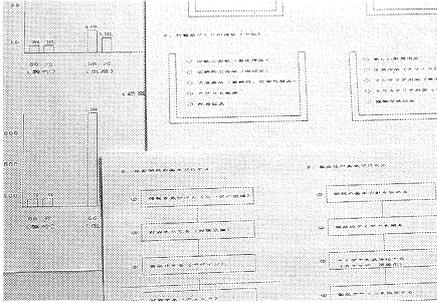


写真1 基本システム等資料作成

(3)商品開発実践的手法演習

- ①コンピュータ処理技術演習
- ②デザインワーク演習
(アイデアスケッチ・図面化・プレゼンテーション)
- ③工芸商品の商品開発プロセス演習
(企画・試作・評価・検討)

コンピュータの利用方法について、製品開発プロセスにおける表現手法を機能面から研究した。コンピュータ処理技術演習については、ハードとソフトの概論研究及び実践的なデザインワークを実施した。また、具体的商品開発を目標に、各研究員が各々開発テーマを設定し、企画、試作、評価、流通、検討等の一連のプロセスを演習した。(写真2、3)

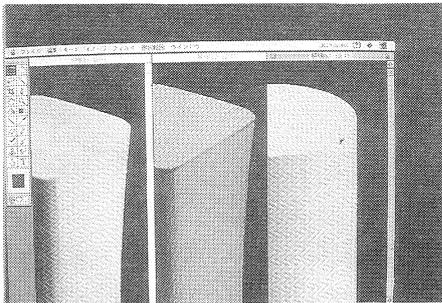


写真2 コンピュータシュミレーション

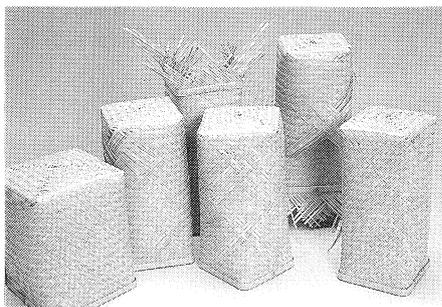


写真3 モデルタイプ試作品 (途中経過)

4. 研究結果及び考察

個人企業が多い竹製品製造業界の現状として、研究テーマの設定や共同研究者の選定については、研究者個人の問題意識や方向性に大きく影響される。共同研究の位置付けとして、共通の問題意識を持った双方向の共同研究が理想であろうが、当所としては、若手後継者ということもあり片方向の養成指導になりやすいのが現実であった。

共同研究の前段として、企業経営者の理解協力はもちろんであるが研究者個人の問題意識、研究テーマに対する研究意欲、研究能力、物理的な制約等まず研究者相互の心的交流や情報交換が必要不可欠であろう。共同研究の雰囲気づくりを含めた研究環境の整備が重要であることを痛感した。

共同研究を終え、モデルタイプの開発試作を最終目標に進めてきたが、研究員個別の対応が難しく、各研究員の試作進度等に差が出たことはいがめない。結果として、工芸商品の商品開発の手法や今後の方向性等については、ほぼ当初の目標を達成できたと思われるが、今後も商品開発手法の検討と具体的商品開発に向け共同研究を継続する必要を感じた。(写真4)



写真4 試作品製作風景